

365 正常妊娠とtrisomy 21妊娠における母体血清inhibin A濃度についての検討

兵庫医大, 大日本製薬ラボラトリープロダクツ部*
澤井英明, 小森慎二, 村中純子, 伊田昌功,
山田幸生, 脇本栄子, 安達進, 香山浩二,
坂井康律*, 西村誠*

〔目的〕妊婦の血清inhibin A濃度は妊娠初期から中期にかけて、trisomy 21 (Down症候群)妊娠において、正常妊娠よりも高値をとる傾向がある。欧米では血清 α fetoprotein (AFP)、血清human chorionic gonadotropin (hCG)または β -hCGや血清unconjugated estriol (uE3)などと同様にtrisomy 21妊娠の確率を予測するための母体血清マーカー試験の1項目として臨床応用が検討されている。しかし本邦ではこれまでに、妊娠中期の母体血清inhibin A濃度とtrisomy 21妊娠との関連については報告がなく、これを明らかにすることにより、inhibin Aの測定意義を検討することを目的とした。〔方法〕本研究ではまず妊娠中期の羊水穿刺の際に、同意を得て採血した日本人の正常妊娠婦人のinhibin A濃度をELISA法にて測定し、妊娠週数とinhibin A濃度との関係を明らかにした。ついで本研究期間中に判明したtrisomy 21妊娠(4例)におけるinhibin A濃度を正常妊娠と比較検討した。〔成績〕妊娠14週から16週にかけて、正常妊婦の母体血清inhibin A濃度は緩徐な減少傾向は示すものの有意差はなく、ほぼ一定値であったが、妊娠17週に入ると有意に低下していた。また、これまで報告されていたAFPやhCGと同様に妊婦体重が重くなるほど、inhibin A濃度は低下傾向にあり、体重補正が必要であることも判明した。正常妊娠例で算出したmedian (中央値)に基づきmultiples of median (MoM値)を算出し、これを体重補正したweight corrected MoMを比較すると、この値が1.5以上を示した症例は全部で5例あり、そのうち3例がtrisomy 21妊娠であった。〔結論〕inhibin Aは本邦でも欧米と同様に母体血清マーカー試験の一つとして臨床応用の可能性が示された。

366 顆粒球エラスターゼ、癌胎児性フィブロネクチン、頸管長の早産予知マーカーとしての評価

尾道総合病院
中岡義晴、平田英司、村上隆浩、松岡敏夫

〔目的〕早産は周産期死亡の原因の中で最も大きな割合を占め、特に妊娠28週までの早産児は予後が悪いために、その予防が周産期管理の大きな課題となっている。今回、顆粒球エラスターゼ(以下エラスターゼ)と癌胎児性フィブロネクチン(以下fFN)の炎症マーカー、および、頸管長を測定し、早産の予知マーカーとしての有用性に関してprospectiveに検討してみた。〔方法〕対象は当院外来を受診した妊婦87例で、妊娠20週から24週に頸管粘液よりエラスターゼ、腔分泌液よりfFN、および、経腔超音波断層法にて頸管長を測定した。塩酸リトドリン内服または入院管理の治療は検査結果に関係なく従来通りに行った。〔成績〕エラスターゼ陽性は41例(47.1%)、fFN陽性は5例(5.7%)、頸管短縮は6例(6.9%)に認められた。治療は49例(56.3%)に行い、早産となった症例は5例(5.7%)であった。エラスターゼ陽性41例中治療は22例(53.7%)に行い、早産は3例(7.3%)であり、エラスターゼ陰性症例と比較し差は認められなかった。fFN陽性5例中治療は3例(60%)に行いfFN陰性症例と比較し差は認められなかったが、早産は1例(20%)とfFN陰性の4例(4.9%)と比較し高い傾向にあった。頸管短縮6例中治療は4例(66.7%)に行い、早産症例はなく、頸管短縮を認めない症例とに差は認められなかった。〔結論〕妊娠20週から24週におけるエラスターゼ、fFN、頸管長は、fFNが早産との関係が示唆されるものの、早産予知マーカーとして明確な有用性を認めることができなかった。現時点での症例数が少ないこともあるために、さらに症例数を増やして検討してみたい。